

漏であると、通過した後から伏兵に攻撃されることがある。敵の居るところが近くて、そして此の方が寄せてゆくにもかゝらず静かにして居るといふのは、さやうな場合には、屹度其の敵は險阻なる要害に據つて居つて、其の要害を恃みにして安心して居るのである。我れと敵との對陣の距離が遠いにもかゝらず、其の近くに居つてそして此の方に戦闘をいごむで来るのは、眞實其の處で戦ふといふのではなくて、此の方の進發して、敵の近くに行くことを望むで、誘ひ出しに来る譯である。敵が陣取れるところの平地であるのは、敵の方で利益するところがあるからである。いろ／＼多くの樹木が動くときは、敵が此の方へ道をつくりつ進むで來つゝあるところである。いろ／＼多くの草中に其の草で障害をこしらへておくのは、伏兵を置いたかと疑はせて此の方を欺かむとするものである。鳥が飛び來つて草叢などに入らむとして俄に驚いて飛びあがるときは其の中に必ず伏兵が居るのである。猪鹿のたぐひが驚いて山中から駈け出して來るときは此の方をつゝむで攻めやうとする奇

兵が横あひから進むで來つゝあるのである。塵が高く飛散して尖の形でつゞいて來るのは、敵の砲車とか、輜重隊とかの車が來つゝあるのである。塵が早く飛散してしかも廣がつて居るときは、歩兵が列を整へて進むで來つゝあるのである。塵がところ／＼に飛散して其の飛散の様子がすじめたつてつゞくやうに見えるのは、敵兵が薪を取りに行けるところである。塵が少しく飛散して其の塵が來るあり往くありするのは陣をかまへやうとて先づ斥候騎兵が往來して居るところである。種々の口實を設けて使者を我が方に寄越して、其の使者の口上を極めて叮嚀にさせて今にも降参する風に見せかけ、そして戦闘準備をます／＼と／＼の／＼あるのは、此の方へ油断をさせておいて進撃しやうといふ計略である。又た之れと反對に使者の言辭頗る強くして我れをおどすやうに述べて去り、後より進撃兵を出すのは、其の實、戦ふのではなくて斯くしておいて其の間に退却しやうとするのであるのだ。今はないけれども古は車戦といふものがあつたから、其の時に輕車といふて車戦に必要な

車を先き立て、よきところの兩側に其の車を据ゑたことがあるが、さる場合は陣取りをすることゝ見てよいことになつて居た。困りもせず居りながら直に和睦を請ふて來たるのは、それは我れに油断をさせやうといふばかりごとである。是れも直戦に見ることであるが、俄かにはしりて兵車をならべるのは、敵中に援軍或は此の方の反撃者と日限時刻を謀し合はせたために其の陣取りをいそぐところである。敵の軍勢が攻撃してかゝつておいて戦陣中に半分はますゝ進撃して來たり、半分は退却してしまふのは號令全軍にわたらぬやうに見せて我れに侮らせて我れの油断につけこまうといふ偽りの計略である。士卒が劍なり銃なりを杖にしてそれで身をさへて佇立しておるのは、糧食缺乏して飢へて居るものであると見なければならぬ場合がある。水汲みに出てたる士卒が其の水を汲むや取りあへず自身先づ飲むでみるのを見たるときは、總軍勢が渴しておるものと見なければならぬ場合がある。當然占領或は鹵獲の出來る利益の土地乃至我れの軍器の遺棄せるをば見ても

進むで之れを取りに來ることをせぬのは大に疲勞をしておるのである。つくれる軍形の中で當然其處に守備兵が居ることゝ思ふて見るに、然るに其處へ鳥が集り來たるは、それは此の方の思ひちがひでたしかに其の鳥に由つて其の陣は虛の陣である。必ず守備兵の居らぬことを證據立てるものである。敵が我れを欺くために陣をこしらへて其の方へ我れの兵力を殺がしてやらうとする計略をしておるのである。敵陣に於て夜間に高聲を發しておるのは大軍であるぞと見せかけやうとする臆病者の集りて恐ろしさのあまりにする高聲である。軍勢がみだれて騒ぐのは其の總司令官や司令官が輕薄で威嚴足らざるがために軍規が勵行されないからのである。はたといふものは進退するときでなければ動かぬものであるに其のはたがみだりに動くのは其の軍勢が亂れて崩れむとするのである。軍吏が怒つて士卒を下知するときには士卒が最早倦みつかれておこたつておるのである。軍隊に使用するために輸送せる其の馬を殺して其の肉を食ふておるときは其の軍は糧食が缺乏しておるのである。煮炊す

る器を樹の枝などにかけて其處に居つて陣中に歸へらぬのは、討死を覺悟しておる敵兵である。くりかへしくすばまりくして何の威嚴も無く只だ叮嚀に士卒に命令しておる將官を見るときは、其の軍の士卒大勢が將官の命に服せぬやうになつたので、頼むやうにして命令しておるところである。格別手柄もないのに、度々威状などを與へて士卒を賞しておるのは、軍勢が減じて餘程戰鬥力に困窮しておるところである。之れと反對に度々士卒を罰しておるのは、軍勢が困憊しておるので、つかれた馬を鞭つてつかうやうに罰を以ておごしておるところである。大將たるものが最初に士卒を暴虐してそして後に士卒が逃げたり或は及向ひはしまいかど其の士卒を懼れるのは、檢閲に精を出さぬ骨頂である。使者を以て人質を送つて來て謝罪するのは、和睦するのではなくて暫時休戦して息を入れてそれから徐ろに戰鬥に取りかゝらうといふの精神を表白するものである。敵兵が大に怒つて進撃の姿勢で馳せ來たり、此の方よりも出兵してお互に迎ひあひをしたにかゝはらず、此の方に攻

易は條
文は恩
などの意
武は刑罰
の意
教は命令
する意

撃してかゝらず。此の方より攻撃しかゝつても平氣で對抗の姿勢をつくりて久しい間取りあはず、さうかど云ふて又た此の方が退却せずに居ると先方でも少しも退却せずに居るのは、是れは敵に何かの計略があつて、此の方が虚勢になつたところにつけこむで其の計略で崩つてしまふといふ料簡に出でたるものである。以上の三十四ヶ條は行軍中のこと及び對陣對抗の場合に於ける心得を説いたもので、苟も總司令官たるものは之れを寸時も忘れてはならぬことである。

兵非益多也。惟無武進足以併力。料敵取人而已。夫惟無慮而易敵者必擒於人。卒未親附而罰之則不服。不服則難用也。卒已親附而罰不行則不可用也。故令之以文。齊之以武。是謂必取。令素行以教其民則民服。令不素行以教其民則民不服。令素行者與衆相得也。

戦争といふものは軍勢を多くましふやすのが、勝になるといふ道理のものでない。

たゞ武勇一過で進むで人数に加はつたりするやうなことをしないで、敵情を深察して之れに遠慮をなし、そしていつも敵のするところを此の方で利用してツマリ敵のするところを虚にし以て勝利を此の方のはたらきでとらず、敵から持つて来て呉れるやうにして取るばかりである。然るにたゞ敵に思慮せずして、常に自分の力をたのみて敵をあなどり、やすつばく見て居ると屹度敵に捕虜にされてしまふのである。それから士卒がまだ大將に親しく随つて何事も命令とあれば心よくうけて動くといふやうになつて居ないのに、然るに此の士卒を多少のおち度があつても仮借なく、嚴重に罰するといふとさる時は士卒は少しの情もない大將であると感じて、心服は勿論遂には命令にも服従しなくなる。服従しなくなつては之れを使用すること大に困難なことである。さりとて士卒が親しく随つて何事も命令のまゝに動くやうになつたときに當つて、之れを大切にして可愛がるばかりで軍法に觸れても之れを罰しないときは、終に士卒は大將の吾を可愛がり、おち度を罰しないのは自分に長

所があるからであると觀念して、其の觀念を増長して驕慢な態度になり、命令しても動かないことがあつたりして使用することが出来なくなるのである。それだからいつも士卒に命令するときには、恩恵を與へて其の恩恵になづかして命令を遵奉させ、それから士卒を整へそつゆるときには刑罰を加へてかしまらせて其の整齊に應じさせるやうにしなければならぬ。かやうにしておけば軍勢は我が手足の一擧一投するやうに活動し、敵の虚に乗じて屹度勝利が取れるといふものである。命令を平素遵奉させておいて其の命令がよく行はれておると、戦場で命令を下したときは士卒は其の命令に服従して其の命令がよく行はれてゆくものである。之れと反對に、平素に命令が行はれて居ないと戦場での命令には士卒が服従しない。命令が平素に行はれて居ると戦場に於て命令がよく行はれるから、畢竟其の命令の奏功と軍隊の服従と兩つながらを相ひともに利得するものである。されば大將たるものは平素に於ける軍隊の訓練が大切である。平素の訓練を怠つて居らうものなら戦場に出

で、役に立つることを得ない。この平素の訓練といふものはよく／＼考慮すべきことである。

尾池氏曰く。本篇も亦た錯簡あることはあきらかで彼の上雨水沫至。欲涉者待其定也。との一句の如きはたしかに水上の軍に入るべきものであるとは張賁の意見であるが、さてそれなら水上之軍の一節の何れに入るべきものかといへば張賁は之れをあきらかにはめるべき個處を指して居ない。徂徠も指して居ない。其の他の連中は無論のことである。予思ふに此の一句はたしかに絶水必遠水の一句の下に入るべきものであらう。斯くすると水上之軍の一節の文理にたがはず又た文勢が通貫するやうである讀者試みに彼れを之れに入れて讀誦したまへ。蓋し一齊の如きは其の副詮本に又上流有雨と又の字を副へて地之助也の上句に接続せしめて居るが杜撰も甚だしいではないか、又の字は全く接続詞であるから前後其の意を接続せしむるものであるが、地之助也の上句は上雨と何等の關係のない句

鄭二勝曰
四帝即四
方之諸侯
也

である。俗儒の不見識は斯様なところにも現られて禁止の至ゆである。語は通鑑したが、是れより先きの句に、黃帝之所以勝四帝也の四帝の字に付いて誤論百出して居るが之れに對して、曹公は黃帝始立。四方諸侯無不稱帝。以此四地一勝之地。といひ李筌は黃帝始受兵法於風后。而滅四方。故曰勝四帝也。といひ梅賾臣は四帝當爲四軍。字之誤歟。言黃帝得四者之利。處山則勝山。處水上則勝水上。處斥澤則勝斥澤。處平陸則勝平陸也。といひ王哲は魏帝成曰。當作四軍。曹公曰。黃帝始立。四方諸侯無不稱帝。以此四地勝之地。一本無作亦。といひ何氏は梅氏之說得之。といひ張預は黃帝始立。四方諸侯亦稱帝。以此四地勝之。按史記黃帝紀云。與炎帝戰於阪泉。與蚩尤戰於涿鹿。北逐葷粥。又大公六韜言黃帝七十戰。而定天下。此即是。有四方諸侯稱也。兵家之法。當始於黃帝。故云然也。といひ張居正は黃帝所以取勝于諸侯之稱也。といひ徂徠は曹公、李筌、張預、黃濬臣等の說を擧げ來たりて何

れにも道理通するとして自個の見解を示さず、但だ梅堯臣、王哲、何氏の誤字説に反對せるのみである。一齊に至りては四帝^ヲ。舊説謂^ニ四方諸侯稱^レ帝者^ト。案此強解也。其實誤字^{ナリ}。今不可^レ考耳。といふて居る。是れに由つて見るときは、曹公、李筌、張預、張居正等の説では、當時四地即ち四方に帝と稱して居つたものがあつたが、黃帝は之れを征伐するに彼の四軍の利益に由つたものたといふことになる。孫武の意は果して左様であらうか。古書には、三皇といふて太昊伏羲より其の子孫の天子の位を繼承せるもの十五代と炎帝神農より其の子孫の天子の位を繼承せるもの八代とそれから黃帝軒轅一人を擧げて其の下は五帝と稱して黃帝の子、黃帝の孫、黃帝の曾孫、曾孫の子の堯、堯から舜といふ順序になつて居るので、他に四方に帝のあつたことを見ることが出来ない。しかし予は此の説に左袒することを得るのは、應劭が史記に黃帝の時に亂を作した蚩尤のことを古の天子であると註してあるその註によらずとも、列子の湯問篇に云へる、其後共工氏與顓頊。

爭^フ爲^レ帝^トの一句に由つて考ふるに太古には帝を争へる位であるから、必ず帝と稱して黃帝の德澤に化ふを欲せざるものが幾人もあつたに相違ないと信ずる。そこで四帝といへることは孫武が當時黃帝の戰術を研究するときにかの記録で四方に帝と稱するものがあつたのを見て、それをば約めて四帝と書いたものであらうと思ふて曹公等に左袒することにした。但だしことわつておくことがある。それは列子の書は偽書であつて列子の書いたものでないけれども、古書たるには相違ないから、之れを引證したのであるが、さりとて其の共工氏なるものが顓頊と争へるといふことは斷じて間違ひであるといふことである。なせなれば共工氏は女媧の代の者で顓頊は太昊伏羲女媧より其の統十五代を経て之れに代はつた炎帝の八世五百六十年を過ぎ更に黃帝より其の子少昊をも過ぎて其の少昊の子となつて居る。顓頊高陽氏が即ち顓頊の事だ、女媧氏の世の共工氏から顓頊まで軽く見積つても五百年の間がある。然るに五百年の後に生れた顓頊が五百年前の共工氏

帝位を争ふたとは馬鹿氣切つた話でないか。又十八史略など正史とすべきものには皆な耻づかしげもなく共工氏は祝融と戦ふたと書いてある。祝融は顓頊の子であるから尙ほ更ら滑稽ではないか。故に予が列子に取るのは、たゞ帝たるを争ふとあるをば取るので、顓頊であらうが祝融であらうがその邊のことは關はらないのである。そこで次手に日本の歴史家なども矢張り支那の太古を註釋としてわからずとして史略などの斯様に間違つたことを其のままに直譯して年氣で居ることを嗤つておいてやらう。さて予が四帝の說に與みすとすると其の他の說に反對するといふ其の理由を擧げなければならぬが、第一は梅堯臣で、此の男は帝の字は軍の誤り歟といふて此の一節をば孫武の言ふことゝは黃帝が四者の利を得て山に處れば山に勝ち云々と註して居るが、然らば此の一節をば凡の字から全部を梅堯臣がいふところの孫武の意に直して見ると凡々此四軍の利益といふものは古の兵法に在りたるものにして黃帝は此の四者の利益を己れに納めて敵の四軍勢と

各々其の處に於て戰ふて勝利を得たりといふことになる。かくの如くに意を取ればさうとも見られるけれども此の一句といふものは脱字もなく明瞭なる句であるから其の明瞭なる句に見るときは、左様に深く見られないのである。左様に深く見るには今少しく其の意味をあらはすべき文字が一句中にあるべき筈だが、左様な文字はない。故に予は梅堯臣の說に従はないのである。王哲のをば徂徠は梅堯臣同様に見て居るが、それは間違ひである。王哲は或曰當作四軍といふのと曹公曰云々といふのと二説を列擧して居るまでい何れを取れるのかわからぬではないか、何氏に至りては梅氏之說得之といふのだから梅堯臣と同様であるので茲にあらためていふまでもないことだ。然るに茲に黃獻臣は四帝と讀みつゝも其の四帝をば伏羲、神農、小昊、顓頊の四帝となせるが其の意何たるか盛張りわからぬ。伏羲、神農は黃帝より以前の者で黃帝と共に三皇といはれて居るものであるが、少昊、顓頊は黃帝の後で黃帝の子と孫とであるが、此の二人は五帝即ち少昊、顓頊、帝嚳、帝

堯、帝舜の中の最初の二人である。五帝の中の最初の二人である。五帝の中の二人と三皇の中の二人とを孫武は何故に引き來つて之れを四帝として黃帝が之れに勝つて居るといふのであらうか、黃帝が戰爭上に於て四軍勢のことに彼の四帝よりもまさつて居たといふならば四帝に戰爭のことがなくてはならぬが其の四帝の何れも戰爭したといふことを書いたものは古書にも今本にも一冊として之れを見ないばかりか四帝中の二人たりとも戰爭しておらぬ。たゞ列子に顓頊が共工氏と帝たるとを争ふたと書いてあるばかりである。さすれば黃帝が黃獻臣の引き出した四帝に勝つて居るとは無意味である。孫武は無意味のものを列擧して以て黃帝が之れに勝つておるといへる筈がない。徂徠の國字解本には徂徠は或説にといふ前置きで以て勝をまさるとよむ右の四軍の法は黃帝の立て玉ふ軍法にて黃帝はかくの如く軍の道を説き玉ひ後世までも亂賊を平け天下を一統する道を教へ玉ふ是れ黃帝の徳のこりの四帝にまさりて五帝の内の第一とする所なりと云ふ意なり此説に

ても道理通するとなりといふて居るが是れは斷じて道理通せぬ言である。予が嘗々しくいふまでもなく假りに此の意味を漢文に綴つて孫武の此の一節と對照して見ればわかる話である。孫武の此の一節はそんなに深く立ち入つて言ふてあるのではない、又たのこりの四帝といふのは誰れ〜をいふのであらう。いや五帝といふのは誰れ〜であらう。史に稱する五帝ならば黃帝の子の小昊より帝舜までいあるから、黃帝はあづかつて居ない。されば黃獻臣の所謂五帝であらうか、其の五帝ならば既に無意味なものであるから、孫武が引出して彼れに勝るの此れにどうのといふ筈がない。要するに此の一節は黃帝が四方の帝と稱して居た自分免許の帝王に四軍の利で勝つたいはれのものであると註するのが穩當である。一齊の如きに至りては、四帝は舊説には四方の諸侯の帝と稱せる者を謂ふとあり、案ずるに此れ強解也、其の實は誤字にして、今は考ふべからざるのみといひて、ごつちかといへば梅堯臣等に與みしながら、其の本文の副詮には軒轅黃帝之所^{ナリ}以^テ勝^ル

四方諸侯稱帝者也。と書いて居る、俗儒愈々以て不冠謂である。四方の諸侯の帝と稱する云々を強解といひながら自身が本文で其の強解をなせるは矛盾も亦た甚だしいではないか。尙ほ更に徂徠は本篇を三章に分けて、絶山依谷云より伏姦之所處云までは軍兵を處く場所を云ふ近而靜者と云ふより必謹察之と云までは物見なり兵非益多と云より未は人を使ふ道を説けりといふて居るが、予の見たところは聊かちがう、予は冒頭より吾進之敵、背之までを陣取りの用心とし、軍行云々より必謹察之までを斥侯の心得とし、兵非益多也より未までを人を使用するの心得と解するものである。それは冒頭より敵背之までは彼の水沫の錯簡を遠水の次へ入れさへすれば文勢が通貫し、軍行云より必謹察之まで文勢が通貫しておるばかりでなく必謹覆三索之といへる軍行云々の句の中にある五字は必謹察之の四字と照應しておるゆゑ、作文の上からいふても、必謹覆三索之の五字のある一句を上章の章則と陣取りの用心の方へ入れることは穩當でない故であ

る。其の他に尙ほ徂徠のあやまりを指摘すれば、そこ／＼にあるけれども此事は之れを看過することにしやう。

* * * * *

又た曰く、虚實篇を假りに哲學的のものとする。此の行軍篇は科學的のものといふべきものであらう。主として實際を説き、實際に於ける用心、心得等に及むたものだ。之れを實例に見るときは、或は源義家が鳥の驚き亂れたるを見て伏兵あるを知り、或は今井兼平がふか田に陥入つたり、或は燕の騎劫が田單の辭の卑きに欺かれて田單に破られたり、或は魯の曹劌が齊軍の旌旗の動けるを見て、進撃して大勝を博したるが如き種々の實例列舉に違あらずであつて、孫武の言、蓋し不朽であらう。

用兵之道。攻心爲上。攻城爲下。心戰爲上。兵戰爲下。

諸葛忠武侯

却することも出来ないから勝利を得ることがならぬ。

我出而不利。彼出而不利。支形者敵雖利我。我無出也。引而去之。令敵半出而擊之利。

此の方から出かけていつては勝利を得られず敵から出かけて来ても勝利を得られないやうな地をば眩度入口を守備してすきのないやうにして敵が攻めて来るのを待つがよい。敵はたとへ幾萬の人数で来るとも入口がせまくて此の入口では戦闘が出来ず、又攻めかゝるとも、我れの方で隘口といふ要害があるから、守備兵は比較的少くてよく、其の少ない守備兵が難澁になれば幾らでも交代して新手を以て戦ふことの出来るので、敵は攻むるに窮して軍を敗北することになる。さやうな處であるから此に注意すべきは、若しも敵の方で我れを位置を轉倒して居るやうなことで、敵が其の要害に居つたならば、我れは其の要害を攻撃してはならぬ。攻撃しても前に云ふ通り、敵は幾らでも新手を出さぬ、甚だ不利である、そこでさやうな時は、我れ

に於ては充分に其の敵情を觀察して又山の要害に守備して居るか、又た大に利益ある土地に居る敵、敵に於ては其の入口の守備を怠つて居るか、之れをしかと見とらねばならぬ。之れと反對にたる上に決断せよ。守備を嚴にして實に居るときは攻撃してはならぬ。之れと反對に怠つて虚中にして双方陣取つて居る其の地をば支形といふのであるが是れは兩方からつづつてさへへて居るやうな工合になつて居て一方が下におり立てば、下りた方がさへへをばつすことになりそのはつした方が敗けになることである。此の支形の處では、敵が我れの方に利益を與へるやうなことがあつても、其れにつりこまれて出ていつてはならぬ、即ち下り立つて行つてはならぬ。必ずさやうな時にはそこを退却してしまへ。退却すると敵は自らも知つて居るとはりの悪地であるから此の方の退却は眞の退却と思ふて、此の方が棄てたる陣地を取りに来るに相違ない。其の取りに来るときに敵兵が半分出で、下りたち来たり、まだ半分は下り立たないところを見計らひ、ドツと攻撃すれば、敵に戦闘の心なきまゝ、不意の攻撃にあひたる

盈は實の
意は擊の

こゝにて敵は戰鬥力を失ふて敗北し是に此の方の勝利を見ることが出来る。
隘形者我先居之。必盈之以待敵。若敵先居之。盈而勿從。不盈而從之。

入口のせまくして中の廣き處即ち四方山を以て包みて中に廣闊なる地面ありて自由なる處は、我の方で敵に取られぬ前に取りて、之れに居つて、屹度其の軍勢を實て、敵の攻め來るを待つがよい。若しも敵の方で先に之れに居つて軍勢が實ちてるやうであるならば、攻撃してはよくない。けれども軍勢が實ちて居ないやうであるならば之れを攻撃するがよい。入口はせまいけれども中が廣場ゆゑ戰鬥は出来る。

險形者我先居之。必居高陽以待敵。若敵先居之。引而去之。勿從也。

けはしく、深くして寄りにくい地形には、我の方で先きに此の處に陣取らねばならぬ、そして其の陣取る場所は屹度高い所にしなければならぬ。高い處に陣取つて

敵の來るを待ち受けて逆撃することにする。しかるに此に我の方の注文通りには參らず敵の方で我より先にかゝる地形に陣取つて居ることがある。さやうな場合には、我れの方は其の近處から退却して、戰場を他方に移すがよい。決してかゝる場處を攻撃しないことである。

遠形者勢均難以挑戰戰而不利。

遠いところに居る敵を見るときは、即ち日本里程の三里位の處に居る敵を見るときは其敵情を充分に視察するがよい。若しも遠い處に居りながら其の軍勢が、此の方と對等の軍勢であるときは、此の方で進撃すれば此の方は行程に疲勞して弱くなり、敵勢の方は此の方の弱つただけ強さがまして來るから、戰鬥の勝利が覺束ない。そればかりでなく、遠い處に居る敵には、此の方から戦ひを挑むで此の方へ引きつけやうとしても第一その引きつけ方が六ヶ敷いのである。よしや引きつけても此の方はそれだけ骨折つて疲勞して居るから、敵の方が強くなつておつて、そこで戰ふて

も勝利を得ることが出来ないのである。

凡此六者。地之道也。將之至任。不可不察也。

總べて上に云へる此の六ツの地形と總司令官の其れに應ずる任務とは、地形の方は地形自然に備はりたる道理であり、總司令官の任務の方は總司令官の任務中最早や此の上なき任務なのであるから、甚だ深く審かに察しなければならぬことである。

故兵有走者。有弛者。有陷者。有崩者。有亂者。有北者。凡此六者。非天地之災。將之過也。夫勢均以一擊十日走。卒強吏弱曰弛。吏強卒弱曰陷。大吏怒而不服。遇敵愾而自戰。將不知其能曰崩。將弱不嚴教。道不明。吏卒無常陣。兵縱橫曰亂。將不能料敵。以少合衆。以弱擊強。兵無選鋒曰北。凡此六者。敗之道也。將之至任。不可不察也。

地形の自然、將官の任務兩つながら審察を要すれば亦た茲に六敗の道理をも知らなければならぬそれであるから是れを之れより説いてみやう。軍隊には速かににげるものがあり、ゆるみを來たして役立たぬものがあり、ゴツと一時にくづれてしまふものがあり、散りくばらくにみだれるものがあり、うしろもむかずに北げるものもあるが、總べて此の六ツの因は、天變地變の災がするところではなくして、其の實は總司令官たるもの過失からおこるものである。ゆるぎにこれを將官の過失と斷言するのである。今是れから其の六敗を實際的に説明しやう。軍勢が双方均しき場合であるのに、今攻撃に當りて、此の方が兵力を其の十分の一丈繰り出してそしてその十分の一で敵に當たると敵は我れの十倍であるから我れの方では最初より敗けときまつて居て、士卒もさやうに觀念せる故、結局は多く戦はずして此の方の士卒は速くにげてしまうのである之れを走といふのだ士卒が剛膽であつたり或は天皇、大統領、國王などに寵あるものがあつて増長したりするのに總司令官やら司令官や

ら指揮官やら一般將官の中で其の増長するものを軍法を以て罰し剛膽の者には命令を以て之れを戒めたりすることの出来ぬ弱い者があると軍隊に締りがなくなる、之れを弛といふ。又た將官連が強いばかりで士卒は弱くて役に立たぬとあつては將官等は捕虜となり士卒も亦た結局捕虜のわなにおちいつてしまふ之れを陷といふのだ司令官などいふ重要な職にある將官が大に怒つて總司令官の命令に服従せず敵にあふたときに己れには己れの戦略があるなど、勝手の計畫を以て敵と戦ふたり最早や此の總司令官などの下に在るべきではない寧ろ戦死するにしかすなど、決心して戦ふことあれば是れは總司令官が人を用ゐるには其の長所を見て長所を用ゐなければならぬのをそれをば知らず即ち司令官などの其れ／＼の能力を知らないためであるが、かくては戦へば必ず山がくづれて来るやうな敗け方をする。それでこれを崩といふのだ總司令官が懦弱にして教練することが不分明で命令や號令を發しても如何にすべきかに戸惑ふやうなことになる。それから將校下士卒の役目役目が且に暮にか

險阻はさ
かしくせ
まいこ
る
主は國主

はりて、將校のすることを下士卒がすることあり下士卒の役目を將校がすることなどありて、軍隊を配備することがたてよこになつて亂調子を呈する、之れを亂といふのである。司令官が敵情を察して之れに虚實を以てあたることの出来ない無能なものであつて、小勢で大勢と戦はせたり、弱卒で強兵を攻撃したりして、少しも兵法上の普通のことたる選鋒といふもの即ち選抜したる優勝の先鋒隊といふものがかつたりすると其の軍勢は、必ずうしろも向かずにげなければならぬことになる之れを北といふのだ。總べて上にいへるところの六ツのことは、敗北の道理であつて總司令官たるものは亦た之れに對しては此の上無き責任事務である。それゆゑに此のことを眞面目に慎重にそして深く察しなければならぬ。

夫地一形者。兵之助也。料敵制勝。計險阨遠近。上將之道也。
知此而用戰者必勝。不知此而用戰者必敗。故戰道必勝主曰無
戰必戰可也。戰道不勝主曰必戰無戰可也。故進不求名退不避

罪。惟民是保而利於主。國之寶也。

地形といふものは、前に云へる如く大切なものであるが、しかし地形は無上の頼みとなるものではない。よき地形によれば必勝するとはきまらぬ。矢張り大將の智略が主になつて勝つものである。それであるから、地形は兵力のたすけになるものであるといふが本當であらう。矢張り大將が智略如何に由るとすると、其の大將たるものは敵の情勢を審察して、之れに對するに虚實を以てして、勝の敵に在るのをも、此の方でおさへ止めて此の方に取ることにし、それから又たさかしい處せまい處遠い處近い處をば勿論それぞれ調査して此の處のことに計算を立て、違算のないやうにすべきものだ。是れが總司令官の當然なすべき役目の道といふものである。此のことをば胸におさめて、さてそれから、其のおさめたる胸中の方寸を戰爭に應用する總司令官は、其の戰爭に屹度勝つのである。然るに此れを胸におさめず、ために戰爭に其方寸を應用することのならぬ總司令官は屹度敗けてしまふのである。かゝ

るわけであるから、總司令官は其の責任の重いといふことを自覺して、戰爭に於ける其の道理が屹度勝つことになつて居るならば、たとへ國主がそこで戰ふてはならぬとか、もう休めておけとかの勅命を下しても、それには一向頓着せず屹度戰ふてよいのである。之れと反對に亦た戰爭に於ける其の道理が勝つことの出来ないことになつて居るならば、たとへ國主が屹度戰へど勅命を下しても、之れに服従することなく、斷乎として戰はないでよい。それであるから、かやうにする總司令官は沈毅果斷な人でなくてはならぬが、其の沈毅果斷の總司令官は敢て進むで勳功を立て、名將と謳はれるやうな名譽を求めない。そんな卑劣な人でない。又た敢て退いて考慮の上に自信を執行して勅命たりとも斷乎としてしりぞけて之れに服従せず、遂にそれがために罪に問はれることがあるとするも、それは覺悟の前であると決心して其の罪を避けるやうなことをしない。そんな意氣地ない人でない。要するに總司令官といふものは、たゞ一軍隊の保全につとめて、一人たりとも士卒を失はぬ

やうに此の事にのみ心を盡くし力を盡くして、そして兵力の滅殺を防いで、國主に利益のあるやうにすべきものである。かくする總司令官があれば、それは誠に其の國に取つての至重なる寶であるのだ。

嬰兒は乳
子はや
すんぢやむ

視^{コト}卒^ヲ如^シ嬰^ニ兒^ト。故^ニ可^ク與^ヒ之^ヲ赴^シ深^ク溪^ニ。視^ル卒^ト如^シ愛^ス子^ト。故^ニ可^ク與^ヒ之^ヲ俱^シ死^ス。厚^ク而^シ不^レ能^ク使^フ。愛^シ而^シ不^レ能^ク令^ス。亂^レ而^シ不^レ能^ク治^ス。譬^レ若^シ驕^キ子^ト。不^レ可^ク用^ス也。

士卒は大切なものである。之れを保全する將は國の寶といふほどであるのであるから大切なものだ。そこで士卒をあつかふ上に心得がなくてはならぬ。總司令官たるものは、士卒を見ること乳呑み兒を見るやうにしなければならぬ。乳呑み兒といふものは、物の道理も分別もまだ合點せず、母親の言ふなりになるのであるから、總司令官たるものは、随分厄介なことに思ふこともあるが、其の厄介なところに棄て難きところがある。即ち道理も分別もわからぬ位のものであるから、何から何までの一切の世話を焼いてやらなければならぬが、此の一切の世話を焼くのが厄介な

ことであるかほりに道理も分別もわからぬから、總司令官の命に唯々として服従して總司令官の手足の如くに働くのである。それであるから、世話を焼くは勿論、道理も分別もわからぬものには、なさをかけていたわつてやらねばならぬ。其の心盡くしを有形無形一切に於て、母親の乳呑み兒に對するやうにするのが總司令官のなさねばならぬことの一つである。良將は乃ちかくするのであるが、それであるから、此の士卒と共に深い溪の中へも飛び込むことが出来る。又た乳呑み兒のやうにするばかりでなく、物心のついた可愛い子を見てやるやうにもするから、それまさかの場合に此の士卒と共に俱に戦死することも出来る。深溪に行くにも、戦死をするにも、總司令官に後れてはおらぬ。皆な其の大將に従つて運命を與にするのである。しかし茲に考へなければならぬことがある。それはねむごろにいたはつてやつて居るにかゝはらず、其の士卒を使ふとすると使ふことの出来ないことがあり、可憐に思ふて大切にしてやつて居るにかゝはらず、其の士卒に命令しやうとすると

命令することが出来ないことがあり隊伍が亂調子になつて居るときに之れを齊へやうとしても齊へることの出来ないことがある、考ふべきことといふのはこれである。これは何の故であらうか、意外な原因があつてのことではない。それは大將たるものが、士卒に對する恩愛仁慈の一面を知つて、之れに忤れるの弊害の他面を知らないからのことである。親が子に對するのでも、可愛がることばかりしてはならぬ、時に撲つこともあり、叱ることもあり。士卒に對するも、それと同様な態度でなくてはならぬのだ。士卒が恩愛仁慈に忤れてしまへば、たとへばだいつ兒やんちや息子やうになるのである。使ふことも命令することも、齊ふこともならぬのは、此のだいつ兒やんちや息子になつて居るのだ。最早斯くなつては之れを用ゐて戦争することが出来ない。そこで總司令官は恩畏ならび行はれなければならぬ。常に軍規を振肅して、かしこまらせておらなければならぬ。

知吾卒之可以擊而不_レ知敵之不可_レ擊勝之半也。知敵之可_レ擊而不知吾卒之不可_レ擊勝之半也。

不_レ知_二吾卒之不可_レ以_レ擊_一勝之半也。知_二敵之可_レ擊_一知_二吾卒之不可_レ以_レ擊_一勝之半也。而不知_二地_一形之不可_レ以_レ戰_一勝之半也。故知_二兵者動而不_レ迷_一。舉而不_レ窮。

自分の方の士卒はたしかに敵を攻撃することが出来るといふことを知つて居るがしかし彼の敵ばかりは攻撃することが出来ない敵であるといふ敵情を知らないのは、まだ／＼それは半勝といふものでたとへ勝つても全勝を得ることが出来ない。敵の方を見て彼の敵はたしかに自分が攻撃すれば攻撃が出来る敵であるといふことを知つて居るが自分の方の此の士卒ばかりは彼の敵を攻撃することの出来ない、つまり彼れより劣つておる士卒であるといふことを知らないのは、それもまだ／＼半勝といふものでたとへ勝つことあつても全勝を得ることが出来ない。彼の敵は此の方で攻撃すれば攻撃することの出来る敵であるといふことを知り自分の方の士卒も彼の敵を攻撃させばさすることの出来る士卒であるといふことを知つても、地形が彼の

敵と自分の方の士卒と戦ふことの出来ない事情の地形になつて居るといふことを知らない、それでは亦た尙ほ々々半勝といふものでたとへ勝つことあつても全勝を得ることが出来ないのである。かゝる戦ひは大抵失敗に了はるのである。それであるから戦争するには、敵の軍勢、味方の軍勢、敵は如何なる處に居る、味方は如何なる處に居る。戦ふ地點はどうかつて居るかなど、いふことを知るの必要がある。彼れを知り已れを知るといふことである。此の彼れを知り、已れを知れる、總司令官は軍勢を動かして戰場に在つて少しも迷ひ心を起こさぬ。軍勢を擧げて戦闘させても變化自在の計略に出でて少しも行きつまりのくるしみをせぬ。極めて氣樂に軍勢を操縦してゆくのである。

故曰。知彼知己勝乃不殆。知天知地勝乃可全。

それであるから、前にいふ通りのが古い書にいふてある。彼れを知り已れを知れば勝ちはそのであやうき勝でなくたしかな勝ちである。敵の情を知り、味方の情

を知つて居たならば其の情に照らして計畫をして戦争をするから必ず勝つが、其の勝ちといふものは、あゝあぶなかつた少しの處で敗れるところであつたなど、胸をなでおろすやうな勝ち方ではなく、たしかに歴とした勝ち方である。天の時を知り、地の利を知つて居れば是れは必ず勝つが其の勝ち方も五分や七分の勝といふものでなく、全くの勝ち方である。全勝を博することの出来るものである。

尾池氏曰く、孫武が前後、左右、上下から物の表裏を諄々として説いて倦ないところは、了得に不朽の言を立つる人だけに違ふたものだ。此の篇は地形から説き起こして一變して用兵に説き及び終はりに古語を以て一篇を結んで居るが、其の文法は例に由つて森嚴であるばかりか、用語も亦た森嚴なものを撰んで居る。蓋し篇中の骨子となつて居るのは、進不求名。退不避罪。惟民是保而利於主。國之寶也。といふのであらうが、此の句の中に在る保民といふことを古來の注には和漢の人々皆な生民を保つといふて、普通人民のことにして居るが、これ

は大なるあやまりである。古來の人々は、國の寶也とある此の下句に重きを措いて見たために人民と見えたのであらうが、此の保民といふことは兵を云ふのである。軍隊をいふのである。孫武は民の字を度々士卒の代名詞に使用してゐる。故に是にも士卒を保全すべきを保民といふたのだ。孫武が士卒の損傷を以て軍事上の重大事として、必勝の算あつても徒に士卒を損傷する戦をば極力排斥してゐる處から見ると其の保民の意は必ず士卒を保全することであるのであらう。予は此に之れを斷言して必ず士卒を保全をいふたものとする。一齊等の如き俗儒は別として徂徠が此の民の字を人民に見て、兵家儒家其の理二途なしといふたのは、殊更に識見家振りたいたい人であつたにも似合はないやうな感がする。

又た曰く彼れを知り、已れを知り、云々の古語で結むたところは、眞に老熟な手際である。此の句に付いて面白い話がある。明治維新の際榎本子等が函館の五稜

郷二勝
日不知
夫不知
己不知
天不知
地不知

郷に立て籠たが其時に黒田伯が總大將で、軍士に大村益次郎がついて五稜郷へ征伐の軍を發することにしたるに、大村は其の作戰計畫を立て、準備をした。黒田伯は發するにのぞんで山内容堂公に其の作戰計畫を示して其意見を聞きたるに、容堂公は之れを臣下に示して詰問したが、其の時後藤伯等座に在るもの多く之れを了得は大村の計畫であるとして賛歎したのであるが只だ一人板垣伯が之れに反對した。伯は此の計畫で見ると敗けいくさである、兵法を知らぬ者の計畫であるから此の計畫で戦つたら敗けるにきまつて居る。と斷乎として言ふた。容堂公は佛然として辭色共に甚だ厲しく、敗けいくさは最先のあしきことを申すものである。此の計畫がなせわるい。と詰問した。伯は徐に口を開いて、兵法に彼れを知り、已れを知れば勝乃ち殆からずと申すことがござる。されば作戰計畫は彼れを知り、已れを知つての上の事にしなければならぬ。然るに此の計畫を見るに軍を五隊に分けて、しかも其の分け方が均一である。敵はかやうに均一にわけて居

不知敵於兵。而敢直行。軍者直是。馬。人。騎。是。隨。深。池。夜。半。耳。

るか居らぬかそれは疑問でござらう。然らば敵情を視察して其の敵兵が配備の強弱を見、此の方で其の強弱に案配することに致さねばならぬでござらう。さるにもかゝはらず均一に隊を分けて五方面から攻撃しやうとの計畫をなすは兵法を知らぬ者のなす處でござれば、茲に敢て敗けいくでござると申して憚らぬ次第でござる。と返答に及むたので、容堂公も其の理ある言には重ねていふところがなかつた。三條公は之れを聞いて大に憂ひ、早速板垣伯を呼び寄せて、仔細を問ひしに伯は前言を陳べて憚らぬ。そこで愈々大村と板垣伯との對決となつたが、大村は伯の彼の言葉をきゝ了はりて、大に憤るかと思ひの外、大に感服したる様子にてお説誠に御尤でござる、これは全く拙者の失策でござる、しかし、最早斯る計畫を以て軍隊を編制し了はりて今は發程中に在ることなれば、今にして之れを變更するときは、士卒に疑ひを起させせて氣勢にも關すること故、このまゝにて一戰のことに致したく存すると謙遜し、且謙遜中にも亦た動かざるところがあつた

ので了得は大村だど一座歎賞したが、板垣伯は之れを聞いて、大によるこび、氣勢のことは御尤である。故に其のまゝになし置くがよろしい。しかし最早敗けいくさを見たる以上は更めて忠言を致すが、斯かる場合に處するの法は援軍でござる。敗を見るに當たりては援軍を以て挽回するが常法でござる故、早速援軍の準備をなさるがよからう、と忠告したるに、大村は言下に其の忠告を容れて早速援軍の準備をしておいたところ、いくさは果して敗けいくさであつたので、援軍を以て攻撃して漸く挽回し、そして勝利を見ることが出来た。此の時容堂公は板垣伯を見て「板垣威張れ〜」と双手を舉げて伯をおだてたことがある此の實話は眞に彼れを知り已れを知り云々の一句を活用したもので、容堂公ではないが、伯板垣が今日と雖も尙ほ威張つてよきところである。

明公視^ル誤^テ伯^ノ子^ヲ。誤^テ視^ル明公^ノ猶^ホ父^ト。願^フ深^ク爲^リ三^ニ殲^ス絲^ヲ與^テ禹^ノ之^ヲ義^ヲ。使^シ平^ヲ生^ス之^ヲ交^ス。不^レ虧^レ於^レ此^ニ。誤^テ雖^モ死^シ無^ク恨^ム於^レ黃^ノ壤^ニ也[。]

吉田松陰曰。孫子。地形。活。用。子。是。大。陰。陽。之。道。也。其。以。二。想。見。其。可。以。大。其。新。二。想。見。

衛はちま
地はやぶ
れはやぶ

九地第十一

地には地の形があり、形のあるところには、勢がある。そこで孫武は地形を説いた上に更に地勢を説くことにして此の九地の題を設けたのであるが、地勢には九ツあつて、各々其の勢を異にして居る。故に兵家はよろしく此の各々の勢に應じて、計畫せねばならぬのである。今日戦術が異なるけれども此の勢を見るの精神に至りては之れを措いて問はないといふ譯にゆかぬ。

孫子曰。用兵之法。有散地。有輕地。有爭地。有交地。有衢地。有重地。有圯地。有圍地。有死地。

孫武申すに、兵法の個條には、地に對して計畫するにあたり、先づ其の地勢を知らなければならぬところから地勢を九ツに區別して、各々其の地に名を與へてある。其の九ツある地勢の名は、かうである。軍勢が固まりにくくちりくばらくな

る散地といふがあり、軍勢が故國の境から敵國へ少しばかり這入つたところの輕地といふがあり、敵も味方も双方を取りやりをするところの爭地といふがあり、双方往來していりまじりになる交地といふがあり、他國へも通じて所謂四通八達なる衢地といふがあり、敵にとつて大切にして極く深きところの重地といふがあり、水なごにやぶれたやうになつておる圯地といふがあり、まはりや山などかこまれたる圍地といふがあり、進退に谷まるところの死地といふがある。之れをば九個の地勢といふのだ。

諸侯自戰其地爲散地。入人之地而不深者爲輕地。我得則利。敵得亦利者爲爭地。我可以往彼可以來者爲交地。諸侯之地三屬先至而得天下之衆者爲衢地。入人之地深背城邑多者爲重地。行山林險阻沮澤凡難行之道者爲圯地。所由入者隘所徒歸

三屬は三
大連屬
城邑は城
のある村
里

者^レ迂^レ彼^レ寡^ク可^ク以^テ擊^ツ我^ガ之^ヲ衆^ヲ者^ニ爲^ス圍^メ地^ト疾^ク戰^ハ則^チ存^レ不^レ疾^ク戰^ハ則^チ亡^ス者^ニ爲^ス死^ス地^ト。

三二六

九個の地勢を今少しく詳しく説いてみように、各國が各々其の國內で戦ふときは、自國の兵たるもの自家のあるところは何里である、妻子眷屬は今何をして居るだらうなどと故郷や家族を始終念頭にして戦争に骨折らす動もすればちり／＼ばら／＼になりたがるものであるから、其の士卒の故郷に近き自國の戦地をば散地となすのである。敵國の土地に入つてまだ其の土地が敵國の入り口であるばかりであるのを輕地となすのである。此の方で占領したならば此の方の利益なるは勿論、敵の方で占領しても敵の方の利益の地をば争地となすのである。此の方でもゆき敵の方でもきていりかはりたちまじりて、双方で其の往來を防止することの出来ない地をば交地となすのである。敵國と敵國以外の他國と此の方の國との三方に連屬して居つて其の通路が四通八達であるから、其處へ逸早く出兵した方が他國の人氣を取り、其

の人民まであはせて、ツマリ天下の大多數の人民の歸服を利得するといふ地をば衝地となすのである。敵國の地に這入ること甚だ深く遠くして、敵國の城のある村里などをいくつも通り越して行つて、其の城や村里を此の方の軍勢がうしろにして居ること即ち背中にしておることになつた場合に其の踏むでおる土地をば重地となすのである。山林やせつしよや湖澤や總べて水に押し崩されてやぶられたやうになつて行軍に甚だ困難するところをば圯地となすのである地形篇にて云つておいた陰形のやうになつており、とりついて這入つてゆくに其の入口が隘くなりておつて、それがために其の這入つた中の廣場から、退却するか或は敵に攻められて不幸にして通げることがあつても其の時には其の入口の表へ出るには遠うまはりをして出なければ、直に其の入口から大勢出ることがならず、そして若し敵が此の方を攻撃しやうと思へば其の敵の人數が少して以て此の方の多數の軍勢を攻撃することの出来るどころ、ツマリかこまれたときに出るにこまり、さりとて大勢居りながら敵の小

勢に攻撃されるやうになつておる地を圍地となすのである。遠くいそいで戦ふたならば勝たずとも敗けはせずして軍勢を保つておることが出来るが、もしもいそいで戦はないやうなことがあつたならば、軍勢は總崩れ塵殺にされてしまふところ即ち前には高い山があり、後には大河が流かれておるなどで、前にも行けず後へも退かれず、進退これ谷はまるといふ土地をば死地となすのである。

是敵散地則無戰。輕地則無止爭。地則無攻。交地則無絶。衢地則合交。重地則掠。圯地則行。圍地則謀。死地則戰。

かゝるわけであるから、散地では寧ろ戦はないがよい、戦つたために士卒が散亂するを却つて本城を危くし遂には亡國の悲運に會せねばならぬやうになるかもしれない。そこで守備を嚴にして時を待つのが肝腎である。輕地でもそれは敵地の入口に這入つたばかりのところであるから、士卒の心向は散地にあるときと同様であるゆゑ、かやうなところでは長くどままつて居るもよろしくない。たとへ士卒に分散の氣な

しとするも前途尙は遠しの心がおこりて勇氣にも影響してくるのである。争地といふものは此の方に必要缺ぐべからざるものであるが、亦た敵にとつても必要缺ぐべからざる者である、其わけは土地が政治上に必要なのではなく、臨時軍事上に必要なのである。此處を占領すると占領した方が守備して敵に攻撃させて勝つべき地勢なので、占領した方が守る方だから樂にして勝ち、後から寄する方は攻むる方だから困り果て遂には攻めた方が負けとなるべき地勢ゆゑ、臨時の軍事上に於ける双方不可缺の地點である。そこで此の地は敵より先に取るのが肝腎であるが若しも敵に先にさられてしまへば、之れを取らうとして攻撃してはならぬ。敵は攻撃を待つて居るのであるから、攻撃すれば敵の計略に陥るものといふべきだ。かゝれば敵に先に取られたときは、敵をして其の地を戦はずして此の方へよこすやうにすべきである。交地は道がいくつも入れちがひに交又して居るのであるから、敵がどの道から飛び出して不意打を喰はし、此の方の軍勢を半々に斷絶するか知れないゆゑ、それをよく

へて戦闘しては、其の士卒が隊列をととのふて來らずふそふいになつて來るやうにさせるのである。

合_レ於_二利_一而動_キ 不_レ合_レ於_二利_一而止_ム。

上にいふやうにさせることの出来る所以のものはそれは此の方が勝利の算立ち其の道にかなふて居てそして初めて士卒を働かせて戦ひ、それから勝利の算が立たずして其の道にかなはないやうでは、戦闘を開始せぬからである。かくすれば畢竟其の勝算の内に、上にいへる敵が自らするところのものをも含まれて居るのであるから敵はさうしてもさうしなければならぬが又たさうならなければならぬやうになつて來る。そこで上にいふやうなはめに陥いつてしまふといふものだ。

敢_テ問_フ敵_一衆_ヲ整_ヘ而_テ將_テ來_リ待_ツ之_ヲ若_ク何_ニ。曰_ク先_ニ奪_フ其_ノ所_ヲ愛_ス聽_ス矣_。兵_ノ情_主速_ニ乘_リ人_ノ不_レ及_ス由_リ不_レ虞_レ之_道也_。攻_ム其_ノ所_ヲ不_レ戒_ス也_。

孫武自らさし出で、開ふが、敵の軍勢が隊伍を整正にして、おつつけ此の方へ攻め

寄せて來る風が見えたときは、此の強敵をみしらふに、さうすればよいだらうか。

孫武自ら之れに答へて曰はむに、それは大變なことで、元來戦争といふものは、絶對にとは云はぬが多くの場合に於て攻めてこられるのは、それはこちらに弱點があるからである、それで攻めてこられるときは既に此の方が虚勢になつて居るといふものであるから、かやうなことがあるにしても、かやうな時にも其の敵が虚勢で居つて此の方が實勢であるやうにしておかねばならぬ。敵が虚勢であるやうにしておくは、攻めてこられる前に當たりて先づ最初に此の方から敵の大切に於て惜むでおかるところのもの即ち糧食とか、本城とか、敵地での大切な場處とかを奪ひ取つておかねばならぬ。かくすると此の方は既に敵の荒廢を抜いてあるのであるから、敵は自然虚勢になつて居るのである。敵が虚勢になつて居る場合は、此の方は實勢である。實勢であるから、虚勢の敵を自由に出來るといふものだ。上に説くところの前後多寡貴賤上下等の事をば、自由に敵にさせるのである。あたかも此の方がいひまかせ

客は敵國に居る
軍人は自
主人は豊
敵軍は地
饒野は豊
饒野は豊
饒野は豊
饒野は豊
饒野は豊
饒野は豊

てさするやうに出来るのである。さればかやうな敵が何十萬攻め來るとも、それに勝つのは何でもないことである。それゆゑに戦争の情合即ちこゝろゆきといふものは、早い勝ちだ、早いのを以て第一とする。機先を制するを第一等とするのである。敵があゝもしたい、かうもしたいと思ふて居てもまだそれに手を出しかねて手をつけずに居る處に乗り込むで、此の方のものにし、全く思ひもよらぬ方角にしたがつてゆき、敵が少しも警戒をしないところ、即ち用心をせぬところを攻撃したりするを速かなりとするものである。之れを一口にいへば、不意にやるがよいといふのだ。

凡爲客之道深入則專主人不克掠於饒野三軍足食謹養而勿勞併氣積力運兵計謀爲不可測投之無所往死且不北死焉不得士人盡力兵士甚陷則不懼無所往則固入深則拘不得已則鬪是故其兵不修而戒不求而得不約而親不

備は深
しうつむ
諸劍は専
諸劍は専
諸劍は専
諸劍は専
諸劍は専
諸劍は専

命而非惡壽也令發之日士卒坐者涕霑襟偃臥者涕交頤

總べて遠く敵國に行軍せる軍勢の戦闘の道といへば、敵國に深く入つて、所謂重地に達すれば、重地に入る位であるから、其の勢は猛虎破竹の勢といふてもよければ、戦争も最初とは違ひて、此の方にとりては、其の易きことが下り坂ともなつて居るところに隋力といふものがあるのと、又た最早や斯く深入りしては、下手には退却して歸國することもならずと用心せるから茲に隋力と用心の上からして心を専らにし上下其の心を一にして、懸命に戦ふ故敵軍はよく此の方に勝つことがならぬ又た我が軍は入り込める土地が土地だけに後方部隊も大抵の場合に續いて來て居ないのでそこであるときはそこの豊饒なる土地に於て糧食を徵發掠奪して我が大軍に之れを以て糧食を給して不足を告ぐることがなく真面目にねんごろに士卒の勇氣を保

獲して少しも疲勞さすことはなく、勇氣を合はせ、精力を積み重ね、軍勢を巧みに運用して變化自在の働きをさせて、其の働き方をば敵の窺ひ知ることの出来ないうやうにするのである。元來此の軍隊といふものは、かやうに深入りして歸へることは勿論、無闇に進むでゆくこともならず、ひとへに敵と戦闘する外に其の運命を決することのならぬところに、はうりこむたならば、かくては最早戦死するのみであると覺つてさうしても北びやうなごとはしないものである。最早戦死するものと覺悟しては、何をしやうとして出来ぬものがあらうか、將校下士卒皆な一致して、精力を傾け盡くすものだ。士卒が非常なる死地に陥つてしまへば、最早其の士卒は勝つてあらうなどといふ欲目のある者は少しもなく、只だ名譽の戦死に由つて名を後世に遺さむことばかりを念じて居るから泰山の崩るゝも驚かず百萬の敵も懼れない。そこで此の地の外に行きごころではないこゝで名譽の戦死をするのだ、といふ場合にすれば、此の我が軍隊は堅固なものである。かく這入ることが深く遠ければ、

四方敵に包まれて居ることゝて、敵地に在る場合とは士卒の心が違ひ、たとへば縛つてあるやうなもので、遁げも走りもするものでない、戦闘しないと自滅するばかりといふ已むを得ないはめとなつては號令せずとも屹度奮闘する。かゝるわけであるから、其の軍勢は隊伍の法に亂れはあるまいかと時々調べる筈の其の調べをもしないのに、各々相ひ戒飾して、規律整然とし、一絲亂れずの觀があり。かうせよあゝせよと命令して注文せぬのに其の結果が注文どほりになつてゆき、最早必死の場合ゆる全軍各々誓を立て、約束しやうといふ場合になつて其の誓約をまだしないのに、各々誓約したも同様に和合しており、信賞必罰の命令を申し渡さぬのに、其の命令を申し渡しての上でするやうに、ひとへに軍法を信じて役目大切に働くゆゑ、其の軍法を信用ありといふものだ。そして又た茲に夢の告げとか、虫の知らせとか乃至は神佛の託宣吉凶の占筮などくだらない妖祥に惑ふやうなことをするのを嚴禁して沒常識の疑念を起させぬやうにしたならば、戦死するまで、其の精神を他方

を擧ぐるのが軍に在るものゝなすべき政治上の道理といふものである。政治は人を治むるに在れば、軍隊に於ても人を治むるの政治が最も必要である。そして其の道理とするところのものは、勇者をそろへて皆な勇者たらしむるに在るのである。士卒を齊ふるの道を會得したならば更に地の理を會得しなければならぬ。地には剛と柔とがある。剛の地は山阪丘陵で柔の地は河海湖澤である。此の山阪丘陵や河海湖澤に自然に具はつて居るところの地の理を會得したならば、皆な其の理に應じて之れを利用することが出来る。それゆゑに用兵に上手な名將が軍勢を率ゐて、戦ふ場合には、衆心を一致せしめ、地の理に利して、其の大軍を使ふことは、あたかも一個の小兒の手を引いて伴れまはるやうにし、一人を召し使ふやうにすることになるのであるが、是れは地理の自然に對して、衆心を齊うするから、已むを得ず、自然にさういふ結果に其の勢がなるのである。

將軍之事。靜以幽。正以治。能愚士卒之耳目。使之無知。易其事。

帥はひき
ゆること
期は戦期
開始の約
束

革其謀。使人無識。易其居。迂其途。使人不得慮。帥與之期如登
高而去其梯。帥與之深入。諸侯之地。而發其機。若驅群羊。驅而往
驅而來。莫知所之。聚二軍之衆。投之於險。此將軍之事也。九地
之變。屈伸之利。人情之理。不可不察也。

總司令官の事業とするところのものは、たとへば音も立てずにひっそりしてそれで始めて敵には暗くかすかに見られて覺られないし、正大にしてかたよらず、それで始めて部下の一般が稽まるのであるが、實にさやうにしなければならぬものだ。また外にも出来るだけ士卒の耳に聽かれ、目に視られたりすることのないやうに其の計畫に付いて士卒に真意のあるところをば、言はず示さず、士卒をして覺ることのないやうにさせ、戦場で爲すところの何の事でも取りかへ引きかへてなし、その謀計も同じことを二度とはせず、始終あらためて、敵は勿論味方の士卒にも覺らるゝことのないやうにさせ。陣所も取りかへをなし、通路も同じ途を始終通せすに必ず

二四
すぐな道をゆけば今度は遠うまはりをするやうにして、敵には勿論味方の士卒にも
思慮判断の違がないやうにすべきである。軍勢をひきゐては其の軍勢にいざ今日は
何時に戦闘を開始するぞとか明日の何時にするぞとか其の場になつて命令をして其
の方法を申渡すこと、たとへば高き屋根に人をのぼらせて其の梯を取り去つてしま
うてもう下るにも下られぬやうに極端に申渡すのである。斯くすれば士卒は最早や
下におりられず、飛び下りたらば死ぬるばかりであるから此の上で死ぬも死は同じ
であると死を覺悟してしまふやうに戦場で必死を期して奮戦するゆゑ、一の方で百
にも千にも當たつて、大成功をするのである。軍勢をひきゐては其の士卒と共に敵
國の奥深くに侵入して此處で一戦に勝敗を決するはといふ場合になるまで、士卒に
其の計畫を申渡さず、そして愈々となつて其兵機を發して戦はずことは宛かも群が
れる羊を驅り立てると同じ工夫に驅使するのである。羊はたとへどやうに驅り
立てられても、一向如何されるのか知らず驅られて向ふへ走り行き、又た驅られて

此方へ馳せ來り、何處でも驅られるまゝあなたへこなたへと馳せまはりて結局どう
されるのか殆んど行きどころも知らないやうになる。實に用兵は斯様にするのであ
るが、士卒は之れを少しも知らずに總司令官のいふまゝになつて驅りたてられるや
うに奮戦しておる。畢竟總軍勢をあつめて其の士卒を危険な處へ投げいれるのであ
るが、此れが即ち總司令官たるものゝ爲すべき事業である。九地に於ける變化の妙
用種々あれども、之れをついでいへばかゝむのどのぶるのどの二つである。此の
二つに歸してしまふ。名將はかゝむで戦機の熟するを待ち遂に士卒を死地といふど
いのかいまりのかいまりたる其の處に投げ入れてそして必死の働きで自然にのびさせ
る。之れをば屈しつ伸びつして勝利を得るの成竹といふものだ、そして此の屈伸の
勝利といふは人情自然の道理といふものである。總司令官はよろしく此の人情自然
の道理であるところの屈より得らるゝ伸の勝利を深く審かに察知せねばならぬ。

凡爲客之道。深則專。淺則散。去國越境而師者絕地也。四達者

に困るゆへ、微發掠奪をして其の糧食を繼續しやうとし、圯地では危険な土地ゆゑそこにはとゞまらず、急いで其處より進むでゆかうとし、圍地では敵に於て兵法を知らなければ格別、兵法の多少を心得ておるものならば、必ず此の方の爲に逃げ路をあけておいてくれるものであるから、従つて士卒は其の方に心を取られて必死の戦を怠るゆゑ、寧ろ此の方で其の逃げ路をふさいでしまはうとし、死地に在ては、士卒への命令號令を、最早やかうなつてはとても生きて還るの見込がないから、死ねば諸共である、皆々其の覺悟して戦へといふやうにしやうとするのである。それであるから、かやうにしたならば、士卒といふものは、圍まれて出るに出来ないときは懸命にふせぎ戦ふものだが、従つて戦はないでおるわけに參らぬはめに陥つた其の時は已むを得ないまゝ、其の士卒は命令がなくとも、懸命に戦ひ、又た事情が火急逼迫を告げて來たならば、かれこれいふて居る場合でないから、士卒は皆々總司令官の命令に服従して手足の如くに使はれて居ることになるのである。

是故不知諸侯之謀者不能預交、不知山林險阻沮澤之形者不能行軍、不用鄉導者不能得地利。四五者不知一非霸王之兵也。

かゝるわけゆる軍争篇に言ひおいたやうに、敵國外の他國の外交的謀計が如何なわけであらうか尙ほ其國の位置、形勢、人情、風俗をも考察しておらないと戦争の場合にのぞむで先づ其の國を此の方の味方に引入れることが出来ないし、又た山林、險阻、沮澤の地形を知らないと行軍して其の敵國へ往くことが出来ないし、又た敵國の土着の者を使用して道案内をさせることをしないと土地に在るところの天然自然の利益を得ることが出来ないものであるが、そればかりか今茲にこれまで説き去りたる九地の變の其の中の一のことでも、覺ることをかいで居たならば、それでは天下の權を握る覇者や道を以て天下を治むる王者の軍でない。覇者王者ほどの軍とは認められない。

夫霸王之兵。伐大國則其衆不得聚。威加於敵則其交不得合。是故不爭天下之交。不養天下之權。信己之私。威加於敵。故其城可拔。其國可墮。

二五〇

眞の覇者王者の軍勢といふものは、前にいへるところの心得あるが故に、一たび敵の大國を征伐するときは、いかに此の方が小國でも彼の方に於ては大國をたのみにして、動員令を發したとて兵士の其令に應ずるものとは少く、ために軍の編制に大變な困却をする。又た愈々戰ふて、此の方の威勢が敵の頭上にかぶさると敵國では他國との交を繼續してその交を結合することが出來ず、倍々其の位置に不安を抱くやうになるものである。かゝるわけであるから世界諸國との外交上の争ひに争はず外交術ばかりで勢力擴張のために、ひつぱりあいなどをするやうなことには腐心せず、又た世界の權力を一手に握らうとすればかりに氣力を養ふことをしないで爲すところのものは常に自身の私に持てる兵力を伸ばして、ツマリ軍備を充實し、軍

隊を教練し、軍勢を涵養していつでも怨敵御盡なれの態度であれ。かくすると一たび戦へば我が軍の猛烈なる威勢が敵の頭上にかぶさつて上にいふとほりに敵國が大國でも士卒は集まらず、他國は同盟しないやうになるのであるから、戦ひは易々たるもので敵の要塞乃至城塞を抜き取ることはお茶の子、敵の國をも亡ぼしてしまふことが出來るのである。

犯は用

施無_レ法賞。懸無_レ政之令。犯_三軍之衆。若使_一一人。犯_レ之以事。勿_レ告以言。犯_レ之以利。勿_レ告以害。投_レ之亡地。然後存。陷_レ之死地。然後生。夫衆陷於害。然後能爲勝。敗。

物事は單純に考へてはならぬ。人事のことは極めて複雑のものであるから、單純なことで物事に成功しやうとしてはならぬ。そこで臨機應變といふものがあるのであるが士卒に對しても各司令官に對しても、突飛なことをして見せることもある、それはまさかの場合に法外の賞を與へて士卒をばげますことである。又法外な命令を

して敵のする隙と其隙につけ入るべき胸算と心中にて約束をなして、何時でもいざとなれば起ちあがる考へで居らなければならぬ。しかし此れ等のことをするには千變萬化自由自在のはたらきがあるが、其のはたらきは無闇なことをするのはなく、チャンと一定したすじ道があるのである。此のすじ道に由つて爲して、決して此のすじ道以外の道には走らぬのである。すじ道があつたならば其すじ道以外にすることが出来ぬから、さぞ窮窟であらうと思ふけれども、其れは間違ひですじ道があつてこそ、安心して其のすじ道の上で千變萬化自由自在の働きが出来るのである。これがなかつたならば働きが出来ないのだ。すじ道といふのは、丁度大工が木の上に墨で線をつけて之れを引き切り、決して眼分量などでは引き切らぬやうに、總司令官が其の一定の方針によつて敵の好きなことをすることにつれられて居つてそして其の隙に附入つて千變萬化自由自在のわざを決行することである。一定の方針が即ちすじ道である。かゝるわけであるから戰場に出ては最初はきむすめのやうに羞しいやら、やさしいやら、きはめてよわいやうに見せかけるのだ、さう

處死の上の戦に脱
 女の上の戦に脱
 男の上の戦に脱
 同一般の戦に脱
 の間に一般の戦に脱
 上の間に一般の戦に脱
 至るに一般の戦に脱
 のりて一般の戦に脱
 敵情あ敗の以世

すると敵軍は勝手なことをして終に隙を見せる。其の隙を見せたら最後、脱け出した兎の宙を飛んでゆくやうにつけ入るのだ。かやうにつけ入つたら敵は防ぎ戦ふひまもなく、散々に敗け、滅茶苦茶になつて北けて、敵は大敗績、我か軍は大勝利となるわけである。

尾池氏曰く、本篇中、散地則無戰より死地則戰までの間、毎句に何氏や張預は吳王闔閭が孫武と問答したる、其の難疑答問をば記入し、徂徠亦た之れを引用せるも、予は其の文が何の書に由りたるかを知らぬよしなきまゝ、茲には其の文意に従ふことをやめた。又た厲於廊廟之上以誅其事といへる誅の字に付いては古來種々の説がある。曹公は誅治也といひ杜牧は誅治其事云々といひ、何氏は責成其事といひ張預は密治其事といひ張居正は治其事といひ、一齊は誅責其事といひ、徂徠はセムと振假名して、其の解に誅ルトハ軍ノ事ヲバ將ニ任カセテ成功ノ上ニテ賞罰ヲ沙汰スルコトナリといふて居るが、治と解するも、誅治

と意味せしむるも、責成と意味せしむるも、密治と意味せしむるも皆な正解といへぬ。徂徠が軍事であるから後にすると解したはよいが、セムと讀ませれば、穩かならぬ。後にするならば、取つておくことゆるのぞく(除)と讀ませなければならぬ。予は除くを正しとしてのぞくと讀ませておいた、意味は徂徠と同じである。誅の字を除(のぞく)と讀むことは康熙字典にもあり又た楚辭の卜居篇に寧誅_ニ勦_ヲ茅_ヲ以_テ力_ヲ耕_ル乎とあつて、誅_ニ勦_ヲ乃_チち_スきとることであるから、取りのけることだ取つておくことにもなるゆる、除くと讀むが正當であると信する。

又た曰く我が軍が露國を征伐したのは、小國が大國を征伐したのであるが、其の時に露國では大國で威天下に震ふて居たにかゝはらず、いざ戦争となれば、動員令を發しても、兵卒はなかく召集に應ぜず、又た戦争酣にして日本軍の威勢が露軍の頭上に加はると同時に佛國も、獨國も其の同盟國なるにもかゝはらず心が

動き出して、露は大に閉口垂れたが、是れぞ孫武が此の九地篇中にいへる夫霸王之兵伐大國則其衆不得聚威加於敵則其交不得合の一句にかなふて居るもので、孫武の言の不朽なること此にも見はれて居る、蓋し當時の我が軍は所謂王者の軍であつたためである。話はかはるが、孫武は此の篇にも重地則掠と掠奪のことを説いて居るがこれは予が數次云へる通り今日の道徳より見れば惡徳で、王者の軍の爲すべきことでなく、又た今日國際條規に由りて陸戰法規も出來ておつて、かゝることは嚴禁してあるのであるから、之れにならうてはよろしからず、さりとしてこれにて孫武をせめてはよろしくない、孫武は何も道徳家でないのであるから、それ位な事は已むを得ぬこととして當然に思ふて居るのは、是れ又たあたりまへのことである。それにつけてもいふておくのは、孫武がこゝに霸王の軍といへる故に霸王は別として王者の軍のかく大國に勝つのは、道徳的意味からだど早合點してはいかぬ、孫武は苟も王者となつて天下を一統する位の氣勢ある國ならば、較

こまはれ
なり。
築壁裏
は二十八
宿中の四
宿即ち星
である。

敵は術数

き、其の火に由つて攻撃してよいことであつたならば、由つて攻撃するがよい。由つて攻撃していけないことであつたならばやめることにするがよい。それから火を此の方で外から放つてよいことであつたならば、なにも敵中の内通者の火を放つを待たないで時分を斗つて火を放つがよい。火が若し風上に發したならば、其の風下を攻撃してはならぬ。風下では敵が焼かれるばかりでなく味方も焼かれる恐れがある。一體風といふものは、晝吹き出したのは久しく吹いており、之れに反して夜吹き出したのは早く止むでしまふのである。

凡軍必知五火之變以數守之。故以火佐攻者明也。以水佐攻者強。水可以絶不可以奪。

總べて戦争するに當たりて此の方の軍隊では、屹度五火の變といふものが、此の方で用ゐることくに敵の方でも此の方へ對して用ゐられて此の方にも起るものであるから、術数をつくして十分に氣を付けて此の敵から來る五火の變に思はぬ敗を取ら

支那の城
一城を
割りに
繞るに
其の
上下の
皆な
なる一
時は
火攻

ぬやう守備しておかねばならぬ。それであるから話をはかるが茲に火攻と水攻とをくらべていふならば、各一得一失ありである。火を發して以て攻撃の援助者となれば、随分熾烈に焼き盡すが、しかしこれには、一つの失がある。それは焔々天を焦がして來ては四方を明るくして、ために此の方の軍勢を幾ら〜と見透かされることだ、之れに反して水を流して攻撃の援助者となればなかく見事に其處を浸して其の柔軟なる方は最も強くして之れに勝つものがない位だ。是れが水の一得である。それでも、水といふものは、これで以て糧道とか交通とかを杜絶することは出來ても、これで以て敵の城を奪ひとることが出來ない、滔々として天をうつ水でも一たび引いてしまへば、城は形を存しておる。是れ又た水の一失である。然るに火となればどうして其の様な間ぬるいことではない、燃えうつれば必ず焼き盡してあとかたもなくしてしまふ。是れ又た火の一得である。双方ともに一得失をそなへておる、そこで火の恐るべく且つ不利益の點のあるにもかゝはらず、これを用ゐなければ

の必要ありしなり。費留は軍資の費へ長滞留の事

ばならぬのである。

夫戰勝攻取而不修其功者凶。命曰費留。故曰明主慮之。良將修之。

已むを得ざるまゝ用ゐるけれども、火攻といふものは、元來忌むべく恐るべく惡むべきものであるゆゑ、決してよろしくはないものである、さりとてそれをして戰へば必ず勝ち攻むるならば必ず取ることの出来るのに、しかるに、その火攻のことは不仁無道のことであるといふて、其の火攻の機能を執行しないのは、此の方の軍に取つて、甚だ不吉ないまゝしいことである、さればさやうなことで日を後らすのを名けて費留といふのだ、費留とは即ち軍費をついやし、戦地に長滞留をするといふことである。それゆゑに古來の兵書に聰明な天子或は聰明な大統領或は聰明な國王は戰爭するとき其の戰爭前に戰爭の事をば深察遠慮し、又た善良なる總司令官は一旦戰場に出でたる以上、已むを得ないときは最早火攻が惡むべく、恐るべく不仁無道のものであるからとて、そんなことに氣を取られて月日を延ばして國家の費用、

人民征稅の苦痛に知らぬ振りをしてはおられぬから、必勝の見込をついたら最後直に決行してしまふといふておる。

非利不動。非得不用。非危不戰。主不可以怒而興師。將不可怒而致戰。合於利而動。不合於利而止。怒可以復喜。愠可以復悅。亡國不可以復存。死者不可以復生。故明君慎之。良將警之。此安國全軍之道也。

上にいふやうなことをもしなければならぬ位のものであるから、勝利の認められない以上は兵を動かしてはならぬ、それよりは、守備を嚴重にして機會を待つがよい、又た阡度攻め取つてしまふことが出来るか認められない以上は、火攻めを用ゐてはならぬ。是れ又た機會を待つべきである。攻め取ることが出来ないで機會を待つのと不仁無道として決行しきらぬのとは自ら識見と決斷とに於てちがふところがあるから、これを間違へてはならぬ。それから又た危険きはまるどむぞこへ敵を引きの

け味方の士卒を投げ入れていなければ戦はないやうにしなければならぬ。それよりか元來最初に考へなければならぬことがある。戦争は國家に取つて大事大切なことであるから、其の國家は一朝の忿怒に激したばかりのことでは何等戦争名義の立たぬやうなことで以て濫りに出兵することはよろしくない。總司令官とても戰場に於て、一朝國主が命の怪しからぬとか、敵の仕向けが癢だとかと一朝の憤慍で濫りに戦闘を開始してはよろしくない。そればかりか勝利が其計畫に屹度合ふて居てそして後に戰場に働き、もしも勝利の計畫が合ふて居ないといふ場合には中止しなければならぬ。彼の忿怒などいふものはどうかしたはづみですぐと再び顔に出して喜ぶとが出来、憤慍も亦たひよいとしたはづみで直ぐと再び心から悦ぶことが出来るのである。けれども國主が一朝の忿怒で無分別なことをして其の國を亡ぼしたならば、其の亡むた國は、どうしても復興することが出来ない。總司令官が一朝の憤慍で無鐵砲なことをして其の士卒を死なしてしまふたならば、其の死むた者は復活すること

とが出来ない。それであるから、聰明な君主は師を興すことを慎重にし、善良な總司令官は戦ひを始むることを警戒する。これはこれ國家を安泰にし、軍勢を保全するところの道であるのだ。

尾池氏曰く、放火は今日の戦術ではあまりに用ゐない、しかし放火のかほりにダイナマイトや重砲で、大破壊を爲すは常法である。けれど其の目的は往時と異つて居る。故に火攻はなしといふてよいのである。但だダイナマイトや重砲の恐怖すべきものにあてはめて見たならば、大に味があるであらう。しかし火薬にも陸戦法規に制限するところのものがあるのであるから、火を以てするを忌めるは今も昔もかはりがないことである。故に孫武の戒は今に用ゐられて居るといふも可なり。蓋し斯篇に於て夫戰勝攻取而不修其功者凶云々の一段。孫武が面目躍々如として、似而非道義家をして後に瞠若たらしめるの感ありだ。

有_リ三殘不_レ殘。有_二仁不_レ仁。而仁者惡_レ殘不仁者惡_レ仁。豈知_二道之變_一哉。究竟篇

用間第十三

用間とは間者を使用することである。間はひまを讀みてすきのことである。すきに入りこんで敵の情勢を探知するのである。表面敵方なるものや、敵の方より入りこめるものを用ひて向ふの様子を探偵するのであるが、此の探偵は其の用ゐる人に由つて役に立つと立たぬとがあるから、用ゐる人の上に付いて云はむがために此の篇あるわけだ。

孫子曰。凡興師十萬。出征千里。百姓之費。公家之奉。日費千金。内外騷動。怠於道路。不得操事者七十萬家。相守數年。以爭一日之勝。而愛爵祿百金。不知敵之情者。不仁之至也。非人之將也。非主之佐也。非勝之主也。

孫武申すに總べて戦争といふものは、首篇にいふておいたどほり、十萬の大軍を興

して、千里の先を征伐するときには、一般人民の出費、國家の奉養などに毎日毎日莫大なる金を費して、非常大變のことである故、内に於ては一般人民、外に於ては出征軍隊皆な共に大騒動をして、其の一般人民は平生の業務も手に付かず、たゞ戦争の爲めに奔命につかれる、殊に十萬の大軍に對して七十萬戸の人民が其の業務を止めなければならぬやうなことになる。右は七に對する一の割合で出征し、其の卒は悉く百姓であつたものだ。今日は雇兵を用ゐるところもあれど大抵の國は國民皆兵で一般人民より召集するのであるが、其の兵數は日本ならば陸軍の常備兵を召集すると二百萬餘になるが今五千萬の國民から、二百萬人を奪られると、二十分の一をどられるわけで、若しも國民兵まで召集するとならば、矢張り七に一の割合になつてくるわけだ。かゝる割合の大軍が出征して、双方異域で守備すること數年に及び、そして僅に一日で決するところの勝利を争ふのであるが、それであるのに其の軍の大將が爵位や俸給ばかりに眼を呉れて、敵方の情勢をも知ることゝ怠るの

は、是れは人民を思はず、國家を念はざる、不仁の至極である。さやうな者は大軍に大將たるべきものでない。國主の輔佐ではない。勝利の主人公ではない。
故明君賢將。所以動而勝人。成功出於衆者先知也。先知者不可取於鬼神。不可象於事。不可驗於度。必取於人。知敵之情者也。

それであるから聰明な君主や賢良な大將であると其の人々が、一旦戦争するとなつて大に働いて大に敵に勝つて、常人意想の外に出でたる成功をするといふ其のいはれのものゝは先知といふて事の前に事を知るからであるのだ。この先知といふものは、何も神怪不思議なことで得られるものでない、即ち神託とか卜筮で得ることは出来ない、人事の面影で覺ることも出来ない。天文で驗することも出来ない。屹度間者を用ゐて其の間の働きに取り得て、敵軍の情勢を知るものが、即ち先知といふものだ。
故用間有五。有郷間。有内間。有反間。有死間。有生間。

神紀は條

五間俱起莫知其道是謂神紀。人君之寶也。郷間者因其郷人而用之。内間者因其官人而用之。反間者因其敵間而用之。死間者爲誑事於外令吾間知之而傳於敵間也。生間者反報也。故三軍之事莫親於間。賞罰莫厚於間。事莫密於間。非聖知不能間。非仁義不能使間。非微妙不能得間之實。微哉微哉無所不用間也。

それゆゑ間者を用ふるに當たりて、其の間者の種類を知らなければならぬが間者に五ツの種類がある。郷間といふがあり、内間といふがあり、反間といふがあり、死間といふがあり、生間といふがある。此の五間は一齊に起つて敵中に入りこむとも其の入りこむ道理を敵の知ることがない。是れをば其の用ふる人如何に由るものであるけれども要するに條理自然の作用であつて國主の寶といふものである。郷間といふものは、敵の郷里の者たるにちなみて其の郷里の者を用ゐて、敵情を知るの

である。内間は敵の官吏たるにちなみず其の官吏を用ゐて敵情を知るのである。反間は敵の間者たるにちなみず其の間者を用ゐて敵情を知るのである。死間はいづはりごとを表にして、そして此の方の間者に見せて其の爲せる仕事を知らせ、そして此の方の間者から敵の間者へ傳聞させるのである。然るに之れを死間といふのは、此の方のツソのことを敵の間者が真に受けて歸つて之れを告げるから、ホントの事と思ふて之れに對する用意をすると全くツソで遂に思はぬ失策を見るので、直に其の間者は殺されてしまふから、死間と名げたものだ。生間は上手に敵中に入りこむで敵國の爲に種々の業務に就いて其の間に敵國の様子を探ぐつて無事に歸國して報ずる者をいふのである。それであるから、間者といふものは大切なものであつても總軍中、諸將官より以下士卒に至るまでの事務中で、此の間者の事務ほどに親切なものはない。間者の事務が一番必要缺ぐべからざるものである。そこで恩賞も他の者にくらべて間者より厚い恩賞はないのである。そのがはりに事務は他の者にくら

べて、間者より隠密な事務はないのである。かゝるわけゆゑ、間者を使用する者は物事を何んでも覺つて居る者でない巧みに使用することが出来ない。又た仁愛義理の心でするのでなくては間者を使用することが出来ない。微細な用心がなくては間者の使用の實効を取り得ることが出来ない。微細であるかよ微細であるかよ。間者といふものは其の使用の出来ないところなく、使用せぬでもよいといふところもないのである。

間事未發而先聞者間與所告者皆死。凡軍之所欲擊。城之所欲攻。人之所欲殺。必先知其守將左右謁者門者舍人之姓名。令吾間必索知之。

間者の事務が大切なものであるだけに、此の方に取つて其の事務の成不成が重大事に關係するものであるから、間者が敵國に入りて其の事務を成し遂げて歸國の途中にあつて、此の方へまだ報告のないのに、既に間者の事務の上は付いて、告げ来る

ものがあつたならば、それは重大事であるから、容赦の場合にあらざるゆる、直に
間者と其の告げた者とを死刑に處してしまふがよい。總べて敵軍を撃たむと考へ、
敵城を攻めむと考へ、敵將を殺さむと考へたならば、其れを決行する前に屹度其
の城守の大將の副官、取次人、門番、留守居等の姓名を知つておかねばならぬ。そ
こで之れを知ることの出来ないときには、間者を用ゐて屹度探索して之れを知つて
おくやうにするがよい。

必索敵間之來間我者。因而利之。導而舍之。故反間可得而使也。因是而知之。故死
間爲誑事。可使告敵。因是而知之。故生間可使如期。五間之
事主必知之。知之必在於反間。故反間不可不厚也。

戦争に際して又た或は戦争中には、屹度敵の間者が此の方へ入りこむものであるか
ら、その間者をば、氣を付けて探索して其の間者にもなみて利益をあたへ、誘導し

て宿につかせるをしなければならぬ。かくすると其間者は安心して此の方にとり
まるものであるが、といまつておれば、之れを利用して敵を陥れることが出来る。

かゝるわけであるから、反間即ち敵の間者を取りこむで使用することは六ヶ敷いと
いへば六ヶ敷いけれども、聖知ある者なれば之れを使用することが出来るのである
誠に反間に因つて敵情を知ることが出来るのであるから、一ツの道がつけば、其の
道すじをたゞつて行くことが出来る。道すじをたゞるといふのは、此の反間をば道
すじとして反間の言に由つて敵情を察知するのである。敵情を察知するから、それ
ゆる郷間も内間も取りこむで使用することが出来るのである。又た反間に由つて敵
情を察知することが出来るから、死間を使用して敵にうそごとをなさしめることを
敵の方へ告げさせることも出来るのである。尙ほ又た反間に由つて敵情を察知する
から、生間も使用して豫期の効果をあげさせることの出来るのである。しかし是の五
間の事務は國主たるものが知らないではいけない。重大親切のものであるから、國

主が十二分に考慮して屹度他人まかせにせず自分が直接に使用するくらゐでなければならぬ。誠に敵情を知ることの出来る第一のものは反間であるのだ。それであるから、國主自ら此の反間をば表ウケですることゝ出来るかぎりの厚遇をするやうにしなければならぬ。

昔殷之興也。伊摯在夏。周之興也。呂牙在殷。故惟明君賢將能以上智爲間者必成大功。此兵之要三軍之所恃而動也。

夏殷周は古の三代國朝伊摯は伊呂牙は太公望

古昔堯舜の後に禹が天下を譲りうけて、それから子孫に與ふることゝなつたが其の國名を夏といふて居たるに、夏の朝廷は漸く衰へて終に暴君の桀といふのを出したために、殷(商のこと)に亡ぼされたが、其の夏を亡ぼしたる殷の最初の天子は湯といふ聖人であつて、其の左右に聖人賢者の臣が集まつた。そして其の中にも伊尹といふのが聖人で最もるらい方であつたが、また殷が夏を亡ぼさぬ前に當たりて、夏に居つたので、湯王は此の伊尹に由つて夏の事情を知り、そして夏を亡ぼすことが

出来た。またそれから下つて、其の殷が子孫の代に至つて、暴君の紂といふのを出したるために、周の文王が之れに代はる天の理數となつて居つたが、其の時に太公望が殷に居つたために文王は此の聖人に由つて殷の事情を知ることが出来て其の子の武王が易々と紂を亡ぼすことが出来た。是れ皆な間者を使用した譯になるのである。たゞ湯王文王共に聖人であるから、使用される伊尹や太公望も聖人であつたばかりだ。かゝるわけゆる明君、賢將は間者を使用するに平凡の者を以てしない。上智といふて智慮の勝れた人を間者となして使用するから、屹度多大なる成功を遂げるのである。そこで此の間者といふものは兵法上の要カギであり、總軍勢の唯一の恃みとしてそして之れに由つて行動するところのものであるのだ。

尾池氏曰く、間者のことは戦争史上、必ず見ざるなきの姿である。故に茲に其の實例を挙げずとも人々皆な如何のものであるかを知れることと思ひ、敢て略することにした。但だ孫武が此の篇の結論に伊尹太公望のことをあげたるは、妙に考へ

らるゝから、一言しておかうと思ふ。伊尹や太公望は聖人であるから、問者などになつて人に使用されるものでない。故に湯王も文王も之れを問者に使用はしない。兩人共に暴君に愛憎をつかして世を避けて居たのを、湯文が招いたのであつて湯文も之れを問者などとして遇しはしなかつた。兩人も左様な真似をしなかつた。然るに兩人が聖人であるから、物事を能く知つて居る。知つて居るから、湯文は之れを聞いて之れに利益したのであつて、其の結果が問者を使用して得たる結果と同じやうになつたといふまでのことだ。孫武は問者は重大親切なものであるから、つとめて上智の人を使用することを教えむために伊尹太公望を引證したのであらう。此の事は誤解のないやうにせぬと文意をも會得が出来なくなるといふものだ。

賢人君子明^{ハカニシテ}於盛衰之道。通^ツ乎成敗之數。審^{カニ}乎治亂之勢。達^ス乎去就之理。

素書

自跋

一世ナポレオン云へることあり。戦争は足でせよ。と蓋し其の速かならむことを欲するの意に出でたるなり。孫武の拙速は亦たナポレオンの意に同じからずや。孫武は奇正、虚實、知彼知己を以て要諦とせるが、其の要諦も實際に處しては拙速に約せらるゝの見らる古今時を同じせず。東西處を異にして其の言の相ひ違はざる。是れ達人の達見ならめ。

然れども孫武の兵法たる。至言にして不朽なるの勿論な

るも、其の戦術の如き、之れを今日の戦術に比するとき
は、其差、雲泥なり、今日の戦争に孫武の彼の戦術を以
てするは、宛も汽車に對するに早駕を以てするが若し、
其の結果に至りては豈に遅速のみならむ。

故に孫武の兵法を見るものは、其の戦術を見るべからず、
作戦計畫も亦た古りたり、されば今は孫武に取るところ
のもの、實に戦略に在り、彼れを知り己れを知り、以て
拙速に其の効果を擧ぐる。是れぞ孫武の道へる處にして
萬世不朽の言なる。予の斯書を講ずる所以、固より孫武

の兵法の不朽を不朽にせむと欲するに由れるならず。惟
だ文學的有價値の名文の惜むらくは、解の至難なるまゝ、
初學少年の之れが繙讀に苦めるより、須らく至易にして
頒つべしこの老婆心に出づ。以を以て其の戦術、作戦計
畫の陳腐や、戦略の萬世不朽なるなどは、予が講意を必
ずしも相ひあづからざるなり。讀者の誤解を恐れ、序に
盡さざることを茲に跋にす。

明治四十三年二月廿五日印刷
明治四十三年二月廿五日發行

定價金一圓

著作
所有

著作者 尾池 義雄

發行者 宮城 伊兵衛
東京市本郷區弓町一丁目二番地

印刷者 遠藤 廉治
東京市麴町區飯田町二丁目六十八番地

印刷所 公木 社
東京市麴町區飯田町二丁目六十八番地

東京市本郷區弓町一丁目二番地

發行所 昭文堂書店

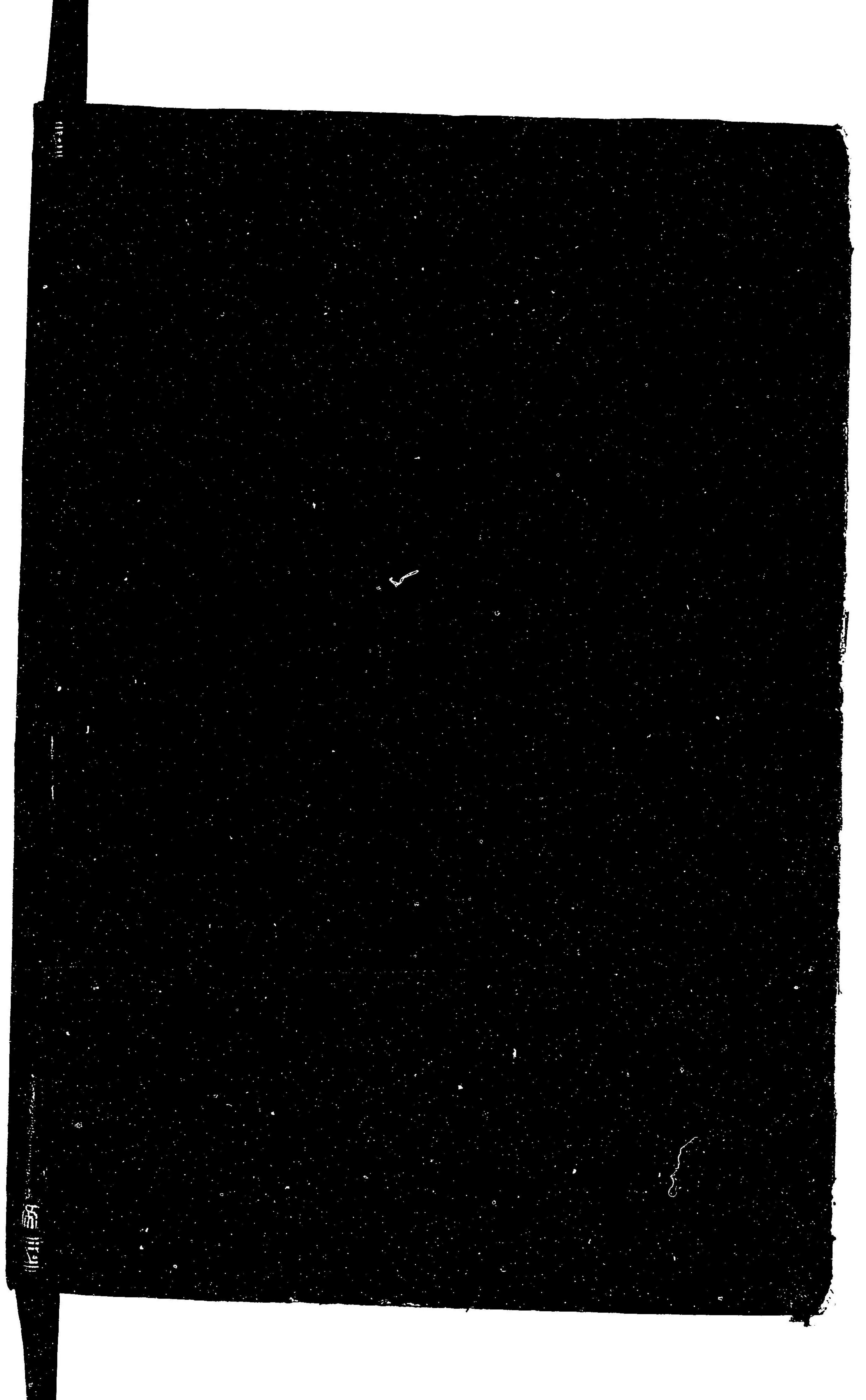
昭文堂發行書目

(◎印はクロース製)
(○印は普通洋装)

| 著譯者名 | 書名 | 冊數 | 定價 | 送料 | 著譯者名 | 書名 | 冊數 | 定價 | 送料 |
|--------|---------|----|-------|-----|--------|---------|----|-------|-----|
| 熊田 蓮城 | ◎日本史蹟 | 一 | 金三圓 | 金二錢 | 熊田 蓮城 | ◎短篇小說集 | 一 | 金五十錢 | 金六錢 |
| 坂本 箕山 | ◎皇室及皇族 | 一 | 金三圓 | 金二錢 | 坂本 箕山 | ◎何處に往く | 一 | 金一圓廿錢 | 金三錢 |
| 村田 祐治 | ◎英文お伽談 | 一 | 金十錢 | 金二錢 | 村田 祐治 | ◎文藝と宗教 | 一 | 金八十五錢 | 金八錢 |
| 天目 杜南 | ◎俳聖五家集 | 一 | 金五十錢 | 金六錢 | 天目 杜南 | ◎明治詩集 | 一 | 金七十錢 | 金八錢 |
| 摩天 主人 | ◎現代之風雲兒 | 一 | 金六十五錢 | 金八錢 | 摩天 主人 | ◎小勞 | 一 | 金三十五錢 | 金六錢 |
| 吉野 牛南 | ◎明治百人十句 | 一 | 金五十錢 | 金六錢 | 吉野 牛南 | ◎小勞 | 一 | 金三十五錢 | 金六錢 |
| 西村 文則 | ◎橋本左内 | 一 | 金六十五錢 | 金八錢 | 西村 文則 | ◎春夏秋冬讀本 | 一 | 金四十五錢 | 金六錢 |
| 戸川 秋骨 | ◎獵人日記 | 一 | 金四圓廿錢 | 金六錢 | 戸川 秋骨 | ◎植物研究 | 一 | 金二十五錢 | 金六錢 |
| 木下 尚江 | ◎新體詩研究 | 一 | 金四十錢 | 金六錢 | 木下 尚江 | ◎育兒鑑 | 一 | 金五十錢 | 金六錢 |
| 吉野 以城 | ◎長根 | 一 | 金六十錢 | 金六錢 | 吉野 以城 | ◎國際平和論 | 一 | 金六十錢 | 金六錢 |
| 筑山 正夫 | ◎小長根 | 一 | 金六十錢 | 金六錢 | 筑山 正夫 | ◎試驗成功法 | 一 | 金五十錢 | 金四錢 |
| 大塚 楠緒子 | ◎露 | 一 | 金六十錢 | 金六錢 | 大塚 楠緒子 | ◎宇宙と國家 | 一 | 金二十錢 | 金四錢 |
| 木下 尚江 | ◎飢渴 | 一 | 金四十五錢 | 金六錢 | 木下 尚江 | ◎刑法講話 | 一 | 金四十錢 | 金六錢 |
| 木下 尚江 | ◎乞食 | 一 | 金三十五錢 | 金六錢 | 木下 尚江 | ◎國事探偵 | 一 | 金六十錢 | 金八錢 |
| 文學士 | ◎藝術と人生 | 一 | 金九十五錢 | 金八錢 | 文學士 | ◎俳句天地人 | 一 | 印 | 中 |
| 吉野 臥城 | ◎日記作法 | 一 | 金四十五錢 | 金六錢 | 吉野 臥城 | ◎米國見物 | 一 | 印 | 中 |
| 吉野 臥城 | ◎小痛 | 一 | 金五十錢 | 金八錢 | 吉野 臥城 | ◎青年立身談 | 一 | 印 | 中 |

328

179



052765-000-6

328-179

孫子

尾池 宜卿/述

M43

BFI-0005

